



発行所
真宗高田派宗務院
三重県津市一身田町2819
電話 059-232-4171
FAX 059-232-1414
HP www.senjuji.or.jp



発行部数 35,000部



文子御裏方から
御母上に宛てた手紙



(奥) 妹君の武子様 (手前) 文子御裏方

文子御裏方の 百年忌に思う

常磐井 和子

その年伊勢一身田の春は、御開山聖人六百五十年忌の慶祝の瑞気に満ちていました。四月六日から十六日に及ぶ御遠忌の間、広い境内は立錐の余地なく参詣の老若男女で溢れ、お念仏の声は地鳴りのように町中に響いていたと言います。

新門の堯猷上人は近衛家のお生まれで、幼少からのお約束で、常磐井家に養子に入られました。そして実弟の津軽英麿様の影響で志を立て、十四歳の明治十九年から明治二十三年まで、ドイツなどヨーロッパ各国に留学しておられました。そのご帰国を待つて、明治三十三年早春に、結婚の儀が行われました。

入興されたのは、西本願寺大谷光尊門主の長女文子様でした。後にシルクロード探検の大事業をされる大谷光瑞上人は兄君、後に社会事業に命を捧げる歌人の九条武子様は十歳違



御開山聖人六百五十年忌の様子

りました。さて実はお二人は、結婚の翌年、第二子祥麿様の急逝に遭遇しておられます。明治三十六年五月三十一日の逝去、六

月五日の御葬儀でした。それからたった五日しか経たないのに、文子様は六月十日の坊守会定例日にいつも通りに御出席なさっています。御簾越しの御聴聞とはいえ、抑えがたい思いもおありだったことでしょう。いかにも温和なお人柄と見える文子様ですが、内に秘めた御覚悟は確かなものでいらしたのでしょう。こうして、御自身の生死の境も、立派に越えていかれたかとお察し申し上げます。

文子様の御遺物の中に、紐でくくった小冊子の束がいくつかあるのを、先日発見しました。それは古びたパンフレットで、御門徒の婦人向けの教養誌の数々でした。切手も帯封も付いたままで、日付けはまさに御命終前後のそれを示しているのです。お元気でいらさるすぐにも読み始められた筈の御本は、披かれることもなく、中に記された法語も生かされることもなく、茫茫と百年の年月を過ごしていました。これは、「生きていくなら、今聴かなければならない。百年忌にあたっての、文子御裏方のお浄土からのメッセージかも知れません。」

宗門を率いるのは、専修寺第二十一世の堯猷上人としてこの大法会円成を待つて、御法主の地位を継がれるのは新門の堯猷上人、と次第相承にも明るい展望が開けていました。

いの妹君という、すばらしい家庭にお育ちでした。御遠忌の勤つた明治四十五年には、お二人の間に、幼いお子様が三人おられましたから、とかく静寂そのものと想像されがちな、本山の奥深いお住まいにも、明るい声や小さな足音が響いていたことでしょう。

しかし、七月に入りますと、明治天皇の御不例が伝えられ、やがて崩御されました。国中が諒闇と申す喪に入つて間もなく、大正元年八月二十二日早暁、なんとということでしょう、今度は文子御裏方が急逝されたのです。お体に次の命を宿されたまま急変を起さされたことと承ります。御入興から十二年、「實明院光暁堯文大信女」と申し上げることになりました。